

# 朝 顔 齋 院

森 本 茂

朝顔齋院は、源氏と交渉をもちながら、源氏の求婚に応じなかつた珍らしい女性であつたが、源氏はこの朝顔齋院の人間の短所を一度も口にしたことなく、最後まで尊敬の念を抱いていた点でも珍らしい女性であつた。しかしながら、源氏との出会いの早々から、源氏の尊敬を集めたわけではなかつた。

源氏がその初期、「はかなしごと」の相手として待遇していた頃から出発して、遂に尊敬の念をもつにいたる過程は、その間に一つの断層があつて構想的・素材的に興味ある問題である。そして、源氏をしてそこに至らしめたのは、朝顔齋院という女が、選子内親王を準拠としていたところに大きな原因があつたと思う。

これらの点について次に述べてみたい。

## 一

朝顔齋院が源氏物語に初めてあらわれるのは、帚木の巻である。

源氏が方違えで紀伊守の家に行くと、女房たちが、ひそひそと源氏の噂話をしているところであつた。

「いといたまめだちて、まだきに、やむごとなきよすが、定まり給へるこそ、さうざうしかんめれ。されど、さるべき限に

朝 顔 齋 院

は、よくこそ隠れありき給ふなれ」などいふにも、思すことのみ心にかかり給へば、まづ胸つぶれて、かやうのついでにも、人の言ひもらさむを、聞きつけたらむ時、など覚え給ふ。異なることなければ、聞きさし給ひつ。式部卿の宮の姫君（朝顔齋院）に、朝顔奉り給ひし歌などを、すこしほほゆがめて語るも聞ゆ。（日本古典全書本、以下同じ）

源氏が式部卿の宮の姫君に朝顔を奉つた歌が、女房たちに間違つて話し合われていても、源氏にとつてそんなことは、別段変つたことでもなく、「聞きさし」てよいことだつた。そのことよりも、この時の源氏には、「藤壺との間の秘密が噂されていないか」ということだけが、気がかりなのであつた。しかし、この秘密は話し合われていなかった。源氏は、「さるべき限には、よくこそ隠れありき」しているのであつて、「さるべき限」の中に、式部卿の宮の姫君をふくんでいると考へても不自然ではない。このことは、次の文からも首肯される。

大殿には、かくのみ定めなき御心を、心づきなしと思せど、あまりつつまぬ御気色のいふかひなければにやあらむ、深うしも怨じ聞え給はず。（葵）

朝顔齋院との恋は大つびらで、源氏は隠す気持などないので、妻の葵上は恨むこともないのである。また、次のようにもある。

昔に変わる御有様なをば、ことに何とも思したらず、かやうのはかなしごとどもを、紛るることなきままに、こなたかなたと思し悩めり。(賢木)

朝顔が齋院になつてからも「かやうのはかなしごと」、つまり朝顔や朧月夜たちへのしのび歩きを、よくつとめていた。

要するに、源氏は帯木の巻以前から、朝顔齋院のもとにしのび通つていた。そして、大して源氏の心にとどまつてもいない女であつた。ところで、「式部卿の宮の姫君に、朝顔率り給ひし歌などを、すここほほゆがめて語るも聞ゆ」の文で、式部卿の宮の姫君の登場のしかたが、余りに唐突であるから、不自然であり、桐壺の巻の次に輝く日の宮の巻を想定し、そこで源氏と藤壺の恋、源氏と朝顔の恋が、主として語られていたのが、何かの事情で脱落した」とする説がある。今ここで「輝く日の宮」の巻の存非を論じようと思わぬいが、朝顔齋院に関してだけいへば、源氏の朝顔齋院に対する待遇・印象の軽さからみて、右の前文「さるべき限には、よくこそ隠れありき給ふなれ」で、じゆうぶんであつて、朝顔齋院との交渉が、「輝く日の宮」の巻で語られねばならないほど重要ではなかつたと思う。

さて、齋院とか齋宮とか、神に仕える方に男が通うという構想は、当時齋王をめぐる歴史的事実や、またそれが物語化されたものからの影響にも負うところがあつた、と思われる。当時、齋宮や齋院が一種の社交場となり、殿上人たちの訪問もしきりで、歌会・管絃の

遊びなども行われた。選子内親王の大齋院御集の詞書の中に、

殿上人あまた参りたるに、み門をさしたれば、内へもえ参らで、御消息を聞えて

とか、また

しも月廿日あまりの夜中ばかり、衛門督、宰相中将、権中将、藏人の少将、山の井など、かむたちめ七八人ばかりつれて参りたまへり。

とかみえるし、栄華物語にも、

今年も十月に齋院に行啓あり。この度は五六日ばかりおはします。十月廿余日庚申なるに、上達部殿上人まゐり、あそびの方の人も、ふみの道の人々も召しあつめ、残るなくまゐりて、歌よみあそびなどあり。(殿上の花見・下)

とある。こういう外来者は、多くの場合、齋王つきの女房に通うことが多かつたが、伊勢物語六十九段では齋王に通う話のみ見える。六十九段のあらましは、およそ次のようである。

昔、男が伊勢の国に狩の使としていつたところ、齋宮の親が「この使の人を特に厚遇せよ」と齋宮に言つたので、齋宮は自分の邸に男を迎え世話をした。二日目の夜、人目をしのんで齋宮が男の部屋に行き、二人は二・三時間会つた。翌朝、歌の贈答をした。次の夜は、男は国守の招待を受け酒宴に列席したため、齋宮と会えず、翌朝後髪を引かれる思いで都へと立つた。

最後に後人の補注かと思われるが、齋宮は文徳天皇の女で、惟喬親王の妹の恰子内親王である、と記してある。六十九段は小式部内侍本では冒頭に置かれ、「狩使本」の初段を飾るが、一説にはこの点

から「伊勢物語」の名が生じたといわれる。伊勢物語は、「狩使本」と「初冠本」と二系統があり、その成立、構成については諸説があり、軽々しく断定できないのであるが、ともかく「狩使本」の冒頭にある伊勢齋宮の段からは、紫式部も鮮やかな印象を受けたのではなかつたか。

結局、現実の齋王をめぐる事件とか、物語などに刺激されて、源氏物語で六条御息所が娘の齋宮に添つて野宮にいるのを源氏が訪れる段（賢木）とか、朝顔齋院に源氏が通ふこととかの着想が得られたのであらう。

## 二

朝顔齋院に関する記述は、賢木の巻の次は朝顔の巻になる。

齋院は、御服にて下り居給ひにきかし。大臣、例の思しそめつること絶えぬ御くせにて、御とぶらひなどいと繁う聞え給ふ。宮、わづらはしかりしことを思せば、御返もうちとけて聞え給はず。いと口惜し、と思しわたる。

朝顔は、父桃園式部卿宮が他界した為、その喪に服するので齋院を退いたのであつた。「宮、わづらはしかりしことを思せば」の文から、また前述の巻の文などから察すると、朝顔の齋院時代に源氏は、何回か通つたものと思われる。しかるに、そういう源氏の具体的な行動は少しも描かないで、「わづらはしかりしこと」で終つてゐるのは、作者が、そういう描写をしてみても意味がない、と考へたに違いない。作者が時々用いる「くだくだしきこと」の中に入るのである。源氏の具体的行動がないところに、作者の解釈がある。

思うに、朝顔が齋院を退くまでの巻（朝顔の巻以前）は、源氏の行動に主をおき、源氏の側から描写していく傾向が強い。従つて、前にのべたように、源氏からみて朝顔のように待遇・印象の軽い女との話は、さして意味を持たず、省略に従ふことが多かつたと思われる。（例え、齋院という特異な立場の女でも、源氏からすれば俗界の女と変らなかつた。）ところが、朝顔の巻以後（といつても、朝顔の巻が大分を占め、後は殆んど登場しない）では、主体は朝顔になり、源氏は従属している傾向にある。前に「構想上、一応の断層がある」と述べたのはこの点である。これについて、一卷ずつの物語絵中心に展開していつた面からとらえるならば、或いは当然のことと受け取れるかも知れないが、しかし、源氏と朝顔の交渉を、内面的に、精神的に、より主体的にとらえていこうとすると、やはりこれは、作者の姿勢の転換であり、作者の創作意識の曲り角として注目しなければならぬと思う。特に、朝顔の巻をたてて、ここに新しく朝顔の生き方と結婚観をまよめ上げたことは、重要な点である。さて、朝顔は既に齋院にたつ前から、源氏との交渉は極めて慎重であつた。その当時の朝顔について、殆んど描かれていないが、わずかながら、次のような文から推察はできる。

かかることを聞き給ふにも、朝顔の姫君は、いかで人に似じ、と深く思せば、はかなきさまなりし御返なども、をさをさなし。（葵）

「かかること」つまり、六条御息所が源氏の愛情の薄いことを嘆いてゐる、そういうような憂き目になるまいと心づもりしてゐるのである。朝顔の巻になると、朝顔のこういう姿勢が固まつて、源氏

の求婚にも応じないのであるが、その塙所はどこにあつたのであるか。その経過をふみながら理由を探つてみる。

朝顔の父、故桃園式部卿宮の妹に、女五の宮がいる。この人は、桐壺帝や大宮の妹で、源氏と朝顔の叔母に当る人だが、この人が父亡き後の朝顔のお世話をしている。源氏がこの方のもとを訪れると、女五の宮は、

三の宮（大宮）うらやましく、さるべき御ゆかり添ひて、親しく見奉り給ふをうらやみ侍る。この亡せ給ひぬるも、さやうにこそ悔い給ふ折々ありしか。（朝顔）

とのべている。つまり、朝顔を源氏に嫁がせることは、故父宮の希望でもあつたし、女五の宮の希望でもあるのだ。これを聞いて、源氏は、

さも侍ひ馴れなましかば、いかに思ふさまに侍らまし。（朝顔）

と述べて、そうなることを望んでいる。また、女五の宮は朝顔に向かつて、同様に故父宮の希望を伝え、次に

今はその、やむことなくえさらぬ筋にてもせられし人（葵上）さへ亡くなられにしかば、げになどてかは、さやうにておはせましあしがるまじ、とうち覚え侍るにも、さらがへりてかくねんごろに聞え給ふも、さるべきにもあらむ、となむ思ひ侍る。（少女）

とのべている。また、世人も、似げなからぬ御あはひならむ（朝顔）と評している。

このように、源氏も、故父宮も、女五の宮も、世人も、周囲の皆が、二人の結ばれることを望んでいる。その上、二人の結婚を邪魔

する勢力とてないのである。朝顔をして求婚に応じうる客観的条件は、じゆうぶんに整つている。しかるに、朝顔は、求婚に応じようとしていない。その一応の理由は少女の巻にみえる。

故宮にも、しか心ごはきものに思はれ奉りて、過ぎ侍りにしを、今更にまた世になびき侍らむも、いとつきなきことになむ。（少女）

つまり、故父宮にも以前源氏の求婚をこぼんだために「強情者」と思われ続けてきた。それが、葵上がなくなつて、条件がよくなつたからといつて、今更にその強情をまげるのは「いとつきなきこと」なのだ。一応朝顔の理由は通つているかのようにだが、朝顔がなぜこぼんだのか、肝心のところに触れていない。そこで、この点の解明に進むと、朝顔の巻に

昔われも人も若やかに罪ゆるされたりし世にだに、故宮などの心よせ思したりしを、なほあるまじくはづかしと思ひ聞えてやみにしを（朝顔）

と述べている。すなわち「なほあるまじくはづかし」が理由のようにだが、これでもなおはつきりしない。この点を一層具体的に説明しているのが次の段である。

げに、人のほどのをかしきにも、あはれにも思し知らぬにはあらねど、もの思ひ知るさまに見え奉るとて、おしなべての世の人の、めで聞ゆらむ列にや思ひなされむ、かつは、軽々しき心のほども見知り給ひぬべく、はづかしげなめる御有様を、と思せば、なつかしからむ情も、いとあいなし。（朝顔）

要点は「自分が、源氏の御情をありがたく思つていることを、源氏

に知つていただいたところで、普通の女たちが、源氏をめて奉るのと同じに見られるだけのこと、その上、他の女が容易に源氏になびくように、自分もなびいたのでは、こういう軽卒な心の状態を源氏に知られるに決つているあの素晴らしい源氏の御有様。だから、慕わしげな心をみせるのは具合がわるい」ということである。

我々は、もつとこれという確固とした拒定の理由を望みたいのであるが、結局そういうものは見出せない。源氏の素晴らしさの前に、自分の身を固くとざしている。こんな場合、我々は、ややもすると「理性的な女性」などといつて、積極的であるかのように評価がちであるが、そんなに強い意志的な姿勢ではない。いつか日がたてば崩れるかもしれない姿勢である。その証拠に、儀礼的な返事しかよこさない朝顔を、源氏は次のように思つている。

わが心をつくし、あはれを見え聞えて、人の御気色の、うちもゆるばむ程をこそ待ちわたり給へ、さやうにあながちなるさまに、御心破り聞えむなどは思さざるべし。(少女)

朝顔の姿勢は、崩れる可能性をもはらんだそれであつたことは、右の源氏の言葉からも分かるが、事實は終りまで崩れることがなかつた。

私は先に「そんなに強い意志的な姿勢ではない」と述べたが、それでいて崩れなかつたのである。このことは、どのように解釈したらよいのだろうか。作者は、どんな所以があつて、朝顔をしてそのような生き方をなさしめたのであろうか。

この点について、先ず思い浮かぶのは、朝顔が齋王であつたといふことだが、「齋王」という聖職からくるイメージだけでは、じゆ

うぶんな根拠になり得ないようである。そこで思うに、朝顔という女の創造に、作者は、実存の齋院に有力な準拠を求めていて、その人の上に虚構を施して、仮にも源氏の求婚に応じさせるには忍びなかつたのではないか。

朝顔の巻以前の朝顔は、前にみたように、源氏の「はかなしごと」の対象であつたが、以後の朝顔は源氏の尊敬を集めている。例えば、次のようにある。

前齋院の御心ばへは、またさまざま異にぞ見ゆる。さうざうしきに、何とはなくとも聞え合せ、われも心づかひせらるべき御あたり、ただこの一所や、世に残り給へらむ。(朝顔)

なべての世のことにても、はかなくものを言ひ交し、時々によせて、あはれをも知り、故をも過さず、余ながらの睦かはしつべき人は、齋院とこの君(朧月夜)とこそは残ありつるを、：なほこころの人の有様を聞き見る中に、深く思ふさまに、さすがになつかしきことの、かの人(朝顔)の御なづらひにだにもあらざりけるかな。(若菜下)

朝顔の巻以後では、このような描写にみられる通り、朝顔は非常に高く評価され、待遇されているわけで、そこに大きく主題の展開がみられるのである。

そこで、朝顔の創造にあずかつた実存の齋院について、次に考えてみたい。

### 三

結論から言うと、朝顔の準拠は、大齋院選子内親王であろうと考

える。次に四点にわたつてこのことを述べてみたい。

(1)紫式部日記にみられる齋院観

紫式部日記をみると、

齋院に、中将の君といふ人侍るなり。

という書出しに続いて、かなり長い文があり、この中将の君のこと、齋院方の女房と、彰子中宮方の女房との比較を試みている。

中将の君は、齋院長官源為理の女で、和泉式部の姪に当り、紫式部の兄惟規の恋人であつたという人である。この君がある人とやり交わした手紙を、偶然の機会にみると、なんとひどく思わせぶりで、自分だけが思慮が深いように考えている。それが、作者にとつて非常に不愉快であつた。齋院方の女房と中宮方の女房とくらべて、

さぶらふ人をくらべていどまむには、この見給ふるわたりの人に、かならずしもかれはまさらじを(紫式部日記)

と述べて、結局「自分こそ賢いという態度で、人や世間を悪く言うのは、かえつて心の浅さだけが見透かされることで、惜しむべきことだ」というのである。

彰子中宮の女房集団に属する作者が、選子内親王の女房集団に対して、意識的に対立感情を示して、興味ある箇所である。

ところで、齋院に対して、作者の思わくはどうであつたらうかともみると、次の文が参考になるであらう。

(齋院方は)ただいとをかしう、よしよしうはおはすべかめる所のやうなり。(日記)

をかしき夕月夜、ゆゑある有明、花のたより、時鳥のたづねどころにまゐりたれば、院はいと御心のゆゑおはして、所のさま

はいと世はなれかんさびたり。またまぎるることなし。(日記)

かういと埋れ木を折り入れたる心ばせにて、かの院にまじらひ侍らば、そこには知らぬ男に出であひ、ものいふとも、人のあうなき名をいひおほすべきならずなど、心ゆるがして、おのづからなまめきならひ侍りなむや。まして、わかき人の、かたちにつけて、年のよはひに、つつましきことなきが、おのが心に入れて懸想だち、物をもいはむとこのみたちたらむは、こよなる人におとも侍るまじ。(日記)

右の文では、齋院をとりまく自然的情趣とか、一般的ふんいきは、好ましく感じていることがわかる。齋院その方には言及していないが、齋院に対しては、女房に対する感情とは全然別に、好ましい印象をもつていたらしいことは、じゆうぶん推察できる。

選子内親王は、村上天皇の第十皇女で、母は藤原師輔の女安子。天延三年(九七五)六月に、十五才で齋院に卜定され、円融・花山・一条・三条・後一条の五代にわたつて、五十七年齋院に立ち、病いの為辞している。大齋院と号し、発心和歌集一卷を著わしている。

(2)齋院時代から仏教に帰依

選子内親王は、他の齋王と異り、齋院時代から仏教に帰依したので、この点が紫式部の心を強くとらえたと考えられる。

むかしの齋宮・齋院は仏教などのことはいませ給けれど、この宮(選子)には仏法をさへあがめ給ひて、あさごとの御念誦かかせ給はず。近くは、この御寺のけふの講には、さだまりて布

施をこそはをくらせ給ふめれ。(大鏡)

源氏物語が、因果応報思想によつて貫れていることは言うまでもないが、若菜下の巻で、故六条御息所の死霊が現われて、娘の秋好中宮(前齋院)にあてた伝言の中に

齋宮におはしましし頃ほひの、御罪軽むべからむ功德のことを、必ずせさせ給へ。(齋宮になつたことは)いと悔しき事になむある。(若菜下)

と述べている。作者は、当時の通念のままに、齋宮は仏と關係を断つというは、罪深いことだと考へていることが分る。その罪の解消の為に、作者の心を述べるに死霊の口をかりてゐるのである。

しかるに、選子は大鏡の文でも分る通りに、齋院時代から仏に帰依してゐたし、齋院中の寛弘九年(一〇一一)に書いた発心和歌集序文には、仏法の功德のことをよく書いてゐる。こういう選子の態度を、今昔物語卷十九「村上天皇御子大齋院出家語」の条で、

現世にいみじくをかしくて過ぐさせ給ひにしかば、後世は罪深くやおはしまさむずらむと人皆思ひけるに、御行ひたゆむことなく貴くして、現に極楽に往生し給ひぬらむとも、入道の中將も最後に参り会ひて見て、喜び貴ばれけるとなむ語り伝へたるとや。(今昔物語)

と賞讃している。だから、こういう態度は、当時の世人の理想であつたと思われ、と同時に紫式部の願うところでもあつたものと考えられる。

(3) 選子内親王に寄せる同情

東郷富規子氏は「齋王考」<sup>註1</sup>の中で、齋王は人間性に反してゐると

いう理由から、齋王の肉親たちは娘を齋王にすることを忌避してゐたということ、榮華物語の馨子・俊子の場合(齋宮)、源氏物語の弘徽殿女御腹の女三の宮(齋院)、狭衣物語の源氏の宮の場合(齋院)などについて述べ、齋王自らも忌避してゐたのではないかといふことを、榮華物語の選子内親王の歌、馨子内親王の場合などについて詳述しておられる。また、齋院の卜定は、齋宮のように場所が遠くないから、それほど忌避されなかつたが、しかし「その齋院にしても、必ずしも好んで卜定されるが如き性質のものではなかつた」として、「背景のない皇女が齋院に卜定」されるのが多かつたことを、榮華物語の馨子齋院・祐子内親王の場合、大和物語の君子齋院の場合について述べておられ、本稿の朝顔齋院の準拠と考へる選子内親王についてみる時に、非常に参考になる。

選子が齋院に卜定される場合、村上天皇の他の皇女の中に適格者はなかつたものか。選子が齋院に卜定された天延三年六月現在で、他の内親王の關係を表にまとめてみた。

村上

- |   |                    |
|---|--------------------|
| 1 | 承子(母安子) …… 死       |
| 2 | 理子(母計子) …… 死       |
| 3 | 保子(母按察の御息所) …… 30才 |
| 4 | 規子(母徽子) …… 現齋宮     |
| 5 | 盛子(母計子) …… 顯光室     |
| 6 | 樂子(母莊子) …… 前齋宮     |
| 7 | 輔子(母安子) …… 前齋宮     |
| 8 | 緝子(母元子) …… 死       |

— 9 資子 (母安子) : 24 才

— 10 選子 (母安子) : 15 才

東郷氏が齋院卜定の年令を調査しておられるが、二十一例の内、十才以下九例、二十才以下九例、二十才以上三例で、平均年令は十才強になつてゐる。すると、右表でみると選子が最も適格者であつた訳だが、仮に資子も候補に上りうる年令ではある。実際に候補に上つたと考えても不自然でない。そこで、候補を資子・選子の二人と考へてみる。

ところが、資子については次のような文がみえる。

内にはひとつ御腹の女九の宮(資子)、先帝(村土) いみじう思ひ聞え給へりしを、この今の上(円融)もいみじう思ひかはし聞えさせ給ひて、一品になし奉り給へり。(榮華物語、月の宴、上)

それに対して選子にはこういう意味の文はない。資子は父にも兄円融にも愛された人で、選子が卜定された当時の円融天皇の思わくがこうであつたのだから、「必ずしも好んで卜定されるが如き性質のものではなかつた」齋院に、資子をはずして選子を当てることは、じゆうぶんに考へられる。選子が年令的にずつと若かつたことは、卜定される大きな条件であつたが、資子との兼ね合いがあつたとみても、右のような訳で、選子が卜定されざるを得なかつたのではないか。

また、選子は生れて五日目に母安子と死別してゐる。紫式部は、日記にも歌集にも母のことを記していないし、その上、源氏物語では、光源氏や夕霧を初め、多くの人が幼少の時に母を失つてゐる。

だから、紫式部も幼少の時、それも記憶に残らないずつと幼い時に母を失つたと考へられる。選子の境遇に同情の思ひを寄せていたると推測される。

選子の義姉規子が、天延三年三月(選子卜定の三ヶ月前) 齋宮に卜定された時、母徽子が伊勢まで一緒に下つてゐるし、源氏物語で秋好齋宮に母六条御息所がついて、やはり伊勢まで下つてゐる。齋宮と齋院とは、地理的に遠近の差はあるとしても、選子の場合、精神的な面のみでもこういう保護は期待できなかったのであるから、紫式部の同情はここにもそがれる余地があつたのである。

(4) 人柄がすぐれていた。

大鏡に、選子の人柄について

御褻よりははじめ三箇日の作法、出車などのもめでたき、おほかた御さまのいと優に、らうくじくおはしましたるぞ。

とある。賀茂祭の日、中宮の生んだ幼い皇子(後一条・後朱雀)を外祖父に当る道長が抱いて、院の行列をみていて、いよいよ行列が前を通る時「このみやたち、みたまつらせたまへ」と言うると、院は御輿の帷の中から赤い袖扇を出して答へた。

殿をはじめたまつりて、「なを心ばせめでたくおはする院なりや。かかるしるしをみせたまはずば、いかでか、みたまつりたまふらんともしらまし」とこそ、感じたてまつらせたまひけれ。院より太宮(上東門院)にきこえさせ給ひける、

ひかりいづるあふひのかげをみてしより、としつみけるもうれしかりけり

御かへし



もろかづらふたばながらもきみにかくあふひやかみのゆるし  
なるらん

このように、齋院として御立派であつた有様がしのばれる。

前述したように、選子は天延三年（九七五）から、五十七年間齋院をつとめたのだから、その間に源氏物語も紫式部日記も書かれたことを思うと、いくら物語に虚構を用いるとは言え、選子のようなすぐれた齋院から、まったく極端に離れた書き様をすることはできなかつたに違いない。宮廷人の感情を思いみても、極端な虚構は許されなかつたと思われる。物語は聞手（読者）を意識して書くものだから、聞手の感情・通念に反しては成功しないものであつた。

改証今昔物語の賀茂齋院記の選子内親王の条に、次のようにある。

選子善詠<sub>倭歌</sub>、<sub>普遣</sub>人干上東門院請見新奇之草子、於  
是上東門院命<sub>紫式部</sub>新撰源氏物語<sub>以遣之</sub>。

事の真偽は別としても、この文といい、大鏡の前記の、選子と上東門院の贈答といい、選子——上東門院——紫式部と連なつていて紫式部が選子を尊敬していたことは間違いないと考えられる。

#### 四

秋山虔氏は「文学にあらわれた好色生活」（中古<sup>注2</sup>）の中で、

光源氏の上に傾注される紫式部の全力は、昔男的好色者を拡大させたが同時に好色者であることに対して、現実世俗の道徳や心情やをしうねく纏絡させる。いいかえれば、光源氏は、重畳する現実の掟にがんじがらめにしばられ、圧迫されながら、そのことゆえに好色者の伝統を切実に受け継ぎ抗う独自の魅力あ

る性格を賦与されたのである。

源氏物語本篇の主だつた女性を源氏中心にみると、藤壺・葵上・朝顔・空蟬・夕顔・六条御息所・紫上・花散里・末摘花・明石上・女三の宮たちであるが、この中で、藤壺初め大部分の女性は、機縁はどうあろうと、源氏の自由になつた女性であつたが、朝顔と空蟬だけは別であつた。しかし、空蟬には伊予介という夫がいて、人妻であるという気兼ねから為さしめたので、もし空蟬が自由な身であつたなら、この事情は異つていよう。朝顔だけは、じゆうぶんな条件が整つていながら、遂に求婚を拒否し通したのであつて、こういう生き方は、宇治十帖の大君の生き方に連り、浮舟の自覚に通ずるものがある。

秋山氏の言われるような歴史的過程からみた中の源氏像、紫式部の男性観は、本篇の中では源氏の対朝顔観と、朝顔の生き方との間のずれとなつてあらわれていると思う。

齋院という特殊な環境にあつた選子、作者も世人も尊敬していた選子を当代目の前に得て、作者は、初めて男性の自由にならない女性の生き方を示し得たのであつた。それに対して、源氏の恋愛観は他の女性に対すると変らず、何ら自覚的な面はなかつたのであり、この二人の考え方、生き方のずれの中に、次の時代の道徳観の進む道筋は示唆されていたのであり、この傾向が進み、ずれが意識的に拡大されて滑稽化されていくと、やがて平中のように、世間の物笑いの材として脚色されるようになっていつたのである。

（昭和三十六年五月三十一日稿）

注1、関西大学「文学論集」第四卷二号  
注2、「解釈と鑑賞」昭和三十六年六月号